

関西農業史研究会々報

No.16-1980.10.18

すっかり秋らしくなりました。研究会も30回を越え、一段と熱のこもった議論が行なわれるようになってきました。会報の報告がたいぶ遅れ御迷惑をかけていますが、今回は、7月22日の第30回例会における、堀尾尚志氏の報告要旨を掲載します。9名参加

第30回例会 (7.22) 堀尾尚志氏 「千歯扱きの成立-機能上よりみる考察-」

(1) 問題の所在

千歯扱きの成立について、従来それが元禄の頃とする見方は動かないものの、元禄以前にも『百姓伝記』にその記載がみられ、一方、7し後代の『和泉志』には、元禄年間に大阪の高石どつくられた旨が記されている。その他、千歯扱きの使用の開始に言及する史料はいくつかあるが、これらの記述を整理できないままにされてきた。

ところが、従来千歯扱きとして、稲扱きと麦扱きを明確に区別せず一括して扱っており、そのため史料における記述の整理がつかなかった。いま、このふたつを機能上よりみて区別して考察し、さらに、この『和泉志』たる史料をクリティークしたところ、「千歯扱き」の成立について明確な結論を下すことができた。

(2) 史料における記載

成立に関するもの限定して、以下簡単に列挙してみよう。

- ・『百姓伝記』(天和年間) 麦扱き、竹製の歯の千歯扱き
- ・『日本永代蔵』(元禄元) 同上
- ・『和漢三文図会』(正徳2) 稲扱き、歯は鉄製、以前は竹と記す
- ・『国家要伝』(享保5) 稲扱き、歯は鉄製
- ・『飛州地方御尋書』(〃12) 同上、10年程前に大坂より伝えられたと記す
- ・『日本輿地通志』畿内部(『和泉志』)(〃19) 同上、元禄年間に、唐石大工運人「かほじめつ」くつたとする。
- ・『近享常陸民間旧事』(文政年間) 同上、使用の始まりは元禄より後
- ・『耕稼春秋』(岡島写本)(天保11) 同上、加賀へ来たのは宝永年間とする。

以上を整理すれば、麦扱きは、稲扱きに先立ち元禄の以前から使われていたが、鉄製の歯をもった稲扱きが元禄年間に出現し、それが各地に広まった。各地における記載は、いずれも、稲扱きの元禄年間成立を傍証するものである。

(3) 機能上よりみたる考察

まず、扱歯と扱歯の間隔(以下スリットと呼ぶ)についてみてみよう。麦扱きのスリットは、『農具便利論』では、4.5mm、現在各地に所蔵されている麦扱きについて実測したところでは、平均5mmであった。それに対し、稲扱きでは、『便利論』の図から推定して、1.5~2.0mm(扱歯にはテーラーがついていゝものど、歯の最大幅のところにおいて)、近代の資料によれば、スリットを1.5mmとする

のがもっとも多い、1.75mmのものはいくらもある。(帝国農会『日本農具図説図譜』兩者において、スリット幅のオーダーが違うのであるが、粉の厚さは1.8~2.4mmで、平均は2mm強である。実験によると、4mmのスリットでは粉はほとんどが脱穀されず通過してしまう。(扱歯と粉の相対速度をあげないかぎり)

つぎに、扱歯の材質についてみれば、竹製の扱歯は摩耗がはげしいので、スリット幅の精度がより要求される稲扱きには適さないといえる。ちなみに、使用を経た麦扱きの竹製の扱歯をみれば、スリットは摩耗で倍ちかくなっているし、扱歯の断面は、その厚さを直径とする円形をなしている。穂首をおとすだけの麦扱きでは、このような状態でも、なみ使用に耐えられるが、稲扱きにおいては、粉が角のとれたスリットにくさび作用でつまり能率があがらないし、更に摩耗が進行するとスリットが広くなって末梢が増加する。したがって、麦扱きでは竹製の扱歯でよいが、稲扱きは、鉄製でないとは用をなさない。しかもスリットの幅が兩者でまったく違うので、兩者の間には互換性がないのである。

(4)『和泉志』なるものについて

『和泉志』なる書名を明確に説明する明確な記載は甚だ少ない。従来、この書名が農業史において使われているのは、『成形図説』にこの書名で、先の部分引用されているところからくるのであるが、この引用部分は『日本輿地通志』畿内部分(『五畿内誌』と略称されている)にそっくりある。『和泉志』は、佐村八郎『国

『書解題』によれば、この『通志』の該当部分44〜48巻を別刷刊行したものであるという。さて、同『通志』は、中国の『大明一統志』にならって編纂され、中国での方法に従いフィールドワークに基づいて書かれ、したがって書名に「志」なる語を付したものである。幕末になると「志」と「史」が混同されるようになってくるが、この時期ではまだ「志」はフィールドワークによるものとする区別が明確であった。従来、その信憑性において軽視されてきた『和泉志』であるが、かくのごとく信憑性は高いものとしてよい。

(5) まとめ

以上のような論拠により、先に述べたように史料の記載は、明確に整理できる。なお、堺をひかえた高石という地理条件、また社会経済的背景について考察をつづけねばならないが、紙数が尽きたのでここでおくこととした。 (坂尾)

田中耕司氏

なお、当日は田中耕司氏も以下のテーマで報告をされました。骨子のみお知らせします。

近世農書にみられる作付順序の地域性

1. はじめに。 (農業経営方式における「自由裁量」の問題、of 加用(家)作物の作付順序と地方特性、of 古島の存在、特に年内最大の作付回数を実施するための作付交替という視点を中心に、分析していく。)
2. 農書にあらわした作付順序方式 (全国的に概観する。)
3. 作付集積を可能にする技術。 1. 早生種の導入。 2. 肉作付術の導入。 3. 施肥
4. 作付順序の地域的特徴。 戦後の多毛作付術と比較して)
5. まとめ。 { 近世徳期にすでに高季の作付集積が確立していた。
 ① "輪作、ではなく、周到な栽培作付術の管理体系として日本農業の発展を考へる。